MOON-４　夜叉２　＜１４＞

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＯＯＮ－４　夜叉２　＜１４＞

【Ｎコード】
Ｎ９２４７Ｍ

【作者名】
みづき海斗

【あらすじ】
記憶を失ってしまった秀。しかし、足は自然と『Ｏｆｆｉｃｅ　Ｔｏ　Ｏｎｅ』の事務所へと－－－
ＭＯＯＮシリーズ第４弾夜叉２　３話目です。

3．秀一３（前書き）

気がるにお楽しみください ＶＶ

3．秀－3

六本木交差点。
秀は『Ｏｆｆｉｃｅ　Ｔｏ　Ｏｎｅ』の事務所に向かって歩いていた。
もう何回もバイクで通った道。
週末の六本木は若者たちで溢れていた。
交差点の角にある有名なケーキ屋はカップルで満員だった。
一人になって随分と時間が経つ。
やがて、彼は事務所が入るビルへと辿り着いた。
「・・・　・・・・」
秀は無言でビルに入って行った。
そして、オフィスのある１２階へとエレベーターで昇る。

チン・・・　・・・・

左右にドアが開く。
そこは既にオフィスの受付。
ＥＤＷＩＮのＧパンに青いシャツを纏った彼を知らない者はいない。
「秀！」
さやかが窓際のデスクから立ちあがった。
一斉に室内がどよめく。
アルバイトの受付嬢も秀の顔を知っている。
「何処へ・・・　・・・・」
かつて秀のアシスタントを務めていた長年の親友　信二が彼の姿に茫然とし、ただそれだけ口にした。
「ちょ・・・・　・・・本当に秀なの！？」
スーツ姿のさやかは、クライアントとの打ち合わせの為にノート

パソコンを片手に出かける間際だった。
休日もオフィスは動いている。
その『時間』を止めたのが、秀である。
「一体、何処へ行ってたんだ！」
信二が秀に掴みかかり、「皆心配してたんだぞ！急にいなくなるわ、マンションも売られているっていうし！」
「そうよ、秀！」
さやかも彼に詰め寄る。「何度もマンションへも携帯へも連絡入れたのに、何の返事もよこさないでどういうつもり！？和人まで何処へ行ってたのよ！」
「今日は」
秀は初めて口を開いた。「別れを言いに来ただけ。」
「え・・・　・・・」
再び、スタッフ全員が沈黙する。
「聞こえなかった？」
秀は口元に冷たい微笑を浮かべ、「今日限り『Ｏｆｆｉｃｅ　Ｔｏ　Ｏｎｅ』は解散する。俺が決めた事。」
「何寝ぼけた事言ってるんだ！」
信二は信じられないという面持ちで、「皆お前のカメラマンとしての実力と統率力に魅かれて、ここに集まって来たんだぞ。それが判ってるのか？」
「そうです！」
去年オフィスに入ったばかりの大卒の青木が、「俺、ずっと秀さんの写真好きです！『Ｘ』のポスター見て、それでここのオフィスを選んだんです。秀さんは俺の夢です！」
力強く言う。
「それはありがたい、と言いたいトコだけど」
秀は、「俺はもう誰も撮る気はしない。皆とツルム気もしない。」
「秀！」

パシッ

言葉と同時にさやかの右手が秀の左頬を直撃する。

「何言ってんのよ、馬鹿っ！！」

さやかは涙交じりに、「今日の秀、どうにかしてるわ。どっかで拾い食いか、寝ぼけ眼で来てるんだわ。」

「・・・　・・・・」

「『Ｏｆｆｉｃｅ　Ｔｏ　Ｏｎｅ』はもう貴方だけのものじゃないわ、皆のものよ！誰が何と言おうとつぶしたりしない！」

そんな彼女の台詞に、

「あ、そう。」

くるりと背を向ける秀。「じゃ、勝手にやりな。」

そう言い残すと、受付の前を素通りし、再びその階に止まっていたエレベーターへと乗り込む。

チン・・・　・・・

長年の友人、さやかと信二の前で扉が軽い音を立てて閉まる。

「・・・　・・・秀じゃないわ。」

さやかは呟いた。「あの人、秀じゃない。別人よ－－－だって雰囲気が違うもの。」

「そうだな。」

信二にもそれが気付いていた様だ。「何か中身が別人みたいだ。あんな秀、今まで見た事ない。」

「じゃ、どうして尾崎さんはあんな事・・・・　・・・」

後輩の同じくカメラマン　徹が2人に尋ねる。

「判らないわ。」

さやかは彼が乗ったグレーのエレベーターの扉を見つめたまま、「私たちに判るのは、あれは秀の本音じゃないって事。『秀』だけど『秀』じゃないって事。」

「ああ。」
信二は頷き、「確かに雰囲気が全然違う・・・　・・・。何て言うか―――上手く言えないけど『過去』を捨てた様な感じだよな。」
その言葉にスタッフの誰もが反応した。
「もう一度、尾崎さんを探しましょうよ！」
「そうだ！この3ヵ月の間に何かあったのかもしれない―――和人の件もあるし！」
スタッフ全員が席を立ち、湧きあがった。
『秀』を探す為に。
その『手掛かり』を探す為に。
「山手ちゃんはライバルオフィスにちょっと探り入れてくれない？」
さやかが指示を出すと、スタッフ全員が一斉に動き出した。
「じゃ、俺は3カ月前まであった連続通り魔事件の事、警察に調べに行きます。」
「この間も同じ事件あったしな―――俺は、和人の事、もっと調べてみるよ。スタッフ内でも『秘密』の所が多かったから。」
「じゃ、俺は」
皆が動き出し、事務所を続々と後にする。
「みんな！」
そんな彼らの背中へさやかがエールを送る様に声をかける。「今度のクライアントに和人を使うよう、説得してくるわ！それまでに秀と和人を探しだして！」

再び、六本木交差点。
信号待ちする彼の横に一台のバイクが止まった。
「たぶん、ここにいると思ったよ。」
黒いヘルメットを取り、青年は氷の微笑で言った。
榊だった。
「何処にいようと俺の勝手だろ。」

秀は無表情に答えた。
「傷が癒えたからと言って、あんまり一人で出歩くなよ。お嬢が拗ねてるぞ。」
「お目付役付きか。」
秀は苦笑した。「狼男(ウルフガイ)が他と戯れるのが嫌いだって事、お前も知っているだろ。」
「承知。」
榊は答え、「しかし、お前を助けたお嬢に、ちょっとは気を使ってもいいんじゃないか？」
「・・・　・・・・」
「乗れよ。」
榊はバイクの後部座席を指示した。「お嬢のティー・タイムの時間だ。付き合う位いいだろ。」
「『お嬢』・・・　・・・・ね。」
秀は苦笑し、バイクを見つめた。「乗れ、とか言って俺のバイクじゃないか。」
榊に促されるままに、バイクの後部席に足をかける。
「安心しろ。」
ヘルメットを秀に渡し、「俺は無免許だ。」
「・・・　・・・俺のバイク。」
ヘルメットを被り、苦い顔を浮かべる秀。
「ちょっとはお嬢の相手をしてやってくれよ。」
榊はエンジンをかけた。
秀の愛車　ＧＴ１０００を榊は走らせ、桜の待つ洋館へと向かった。

3．秀一3（後書き）

『夜叉　4』あと1シーンで原稿終りますー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9247m/

MOON-４　夜叉２　＜１４＞

2010年10月9日03時37分発行